

生き方上手で健康長寿



奈良学園大学
保健医療学部
リハビリテーション学科
滝本 幸治 先生

日本は世界に誇る長寿国ですが、一方で自立した生活を営むことができる健康寿命と実際の寿命との間には、約10年のギャップがあるといわれています。つまり、この期間が不健康期間ということになりますが、この期間をできるだけ短くすることができないか、関心をもたれている方は少なくないのではないのでしょうか。今回の登美ヶ丘カレッジでは、「フレイル予防」に着眼して、運動・栄養・社会参加という3つの側面から健康長寿を叶える生き方上手なヒントをお伝えしたいと思います。

開催予定

日時：2023年6月17日(土) 14:00～15:30
場所：奈良学園大学 1号館 4階 1409教室
定員：30名

こちらから
申込みください。



第14回登美ヶ丘カレッジ
申込フォーム

※ソーシャルディスタンス・換気・消毒の徹底等、感染防止対策を行います。
※教員だけでなく学生も参加します。

ニュースレター第9号 編集後記ご挨拶

令和5年4月奈良学園大学が10年目の節目を迎え、奈良市登美ヶ丘にワンキャンパスに統合されて2年目を迎えました。

互いの健康や安全に配慮しながら、ようやくコロナ禍において制約された活動が少しずつ緩和されつつあります。

今年度の入学式は、全国大会「金賞」を誇るマーチングバンドの演奏や人間教育学部森瀬准教授の国歌独唱がアリーナに響き渡る中、多くの意欲あふれる新入生を迎えるスタートとなりました。

また、海外の連携協定校から11名の特別聴講生が3年ぶりに共に学び始めました。これまでに、日本が大好き、奈良が大好きと奈良学園大学での学びを深めた後に、日本の大学院修士課程に進学された留学生もおられます。

昨年度の国際交流につきましては、「2022国際交流記録文集」をHPでご高覧頂ければ有り難く存じます。一層のグローバルな交流が学生や地域の皆様と共に豊かに拡がることを期待されます。

今後もニュースレター及びHP等でも学生の活躍を見守り応援して頂けると幸いです。



奈良学園大学
社会・国際連携センター長
善野 八千子

第12回奈良学園大学登美ヶ丘カレッジ開催

令和5年2月4日(土)は、本学人間教育学部人間教育学科オチャンテ カルロス先生が講師を務め「身近になった外国人との暮らしーみんなで多文化共生を考えようー」をテーマに公開講座を開催しました。



奈良学園大学
人間教育学部
人間教育学科

オチャンテ・カルロス 先生

グローバル化が進み、近年において日本に住む外国の人々が日本を支える側となってきています。日本社会がますます多様化される中、外国人との暮らしでまだ多くの課題が残っています。今回の講座では「多文化共生」が大事なキーワードになっています。外国人として、これまで日本で体験した様々なエピソードの中で異文化を理解することが最も重要な学びでした。多文化共生と呼ばれる社会には人権と同様、異文化理解が存在しない限り難しいといわれています。今回の講座では自己体験に基づいて、およそ27年間に亘り、学生の頃の視点、社会人の視点、また現在、父親としての視点で日本の多文化社会を見つめ、どこまで進み、どんなところにまだ課題が残っているかを会場の皆さんと考えました。

日本の外国人の人口データで外国人の移民現象(ディアスポラ)を説明し、日本の社会でどのような役割を果たしているか説明しました。また、移民の子どもの背景について説明し、公立学校の多民族化の実態について話しました。

外国人と交流したくてもできる機会が少ないと会場から意見があり、地域でローカルなレベルから隣人に住む外国の人と交流はかる必要があると話しました。今後、外国人とうまくコミュニケーションを取って、お互いの交流によって異文化の理解をクリアし、多くの外国人の方が地域と関わることを願っています。



ニュースレター Vol.9 によせて



奈良市教育委員会
教育長
北谷 雅人

奈良市では、コロナ禍においても子どもたちの学びの保障に取り組んできました。そのひとつが全国に先駆けて整備した一人一台タブレット端末の環境です。臨時休校中にはオンラインを活用した学習を行うなど学びの保障を行ってきました。現在は、各学校で工夫を凝らした授業に取り組み、ICTを活用した個別最適な学びと協働的な学びを進めています。

また、教科の枠にとらわれず、課題を発見・解決する学びであるArts STEM教育や、奈良の世界遺産や文化財、豊かな自然環境や伝統文化を通して探究的に学ぶ世界遺産学習など、子どもたちが自ら未来をたくましく切り開いていくことができる力を培えるよう取り組んでいます。

これらの教育には、奈良学園大学の先生方がもつ専門性や研究、教職をめざす学生の皆さんの熱意を生かしながら、奈良学園大学と本市がこれまで以上に連携を図り、奈良市の教育を充実させていきたいと考えております。

地域の皆様へのご挨拶



奈良学園大学
学長
金山 憲正

いよいよ新年度を迎えました。今年度は保健医療学部の大学院に新たにリハビリテーション学研究科を開設いたしました。大学院には既設の看護学研究科とで2つの研究科が整ったことになり、より高度な研究に取り組める体制になってまいりました。リハビリテーション学科では「3次元動作解析システム」や「バーチャルリハビリテーションシステム」などの先進的な機器が揃っており、それらを用いて高度な専門性を身につけた学生を育てています。今後は、けいはんな学研都市「大学・研究機関」共創事業プロジェクトの一員としてこれまで以上に役割を担うことが出来るのではと思っています。

また、本年度よりマーチングバンド部の活動拠点が三郷から登美ヶ丘キャンパスに完全に移転いたします。昨年度末に楽器や大道具類など全てをアリーナ内に整備した保管場所兼練習所に運び終わりました。このことにより、演奏会やイベント参加へのご依頼がある毎に三郷から楽器を運搬していた煩雑さから解放され、地域の皆様により多くの機会にご協力できるようになりました。

本年度で開学10周年を迎えるというまだまだ歴史の浅い大学ではございますが、よりよい学生の輩出と地域への貢献を目指して教職員一同全力で取り組んでいます。今後ともよろしくお願いたします。

奈良学園大学の教員紹介

奈良学園大学 人間教育学部 人間教育学科

荻布 優子 先生



私は療育センターに心理士として勤務し、発達に気になるところのある子どもとその保護者の支援に従事したあと、本学で特別支援学校の教員を養成に携わっています。障害児の育ちの特徴や障害発生のメカニズムに関する科目を担当し、研究では発達障害(特に発達性ディスレクシア)に関心を持っています。例えば「なぜ綺麗な文字を書けないといけないのか?」というような世の「あたりまえ」に疑問を持つことから始め、書くことに苦手意識を持つ子どもでもストレスを感じにくく効率的な学習方法の開発や、小学校と協働した支援システムの構築を行っています。

奈良学園大学 保健医療学部 看護学科

堀内 美由紀 先生



私は国際看護学領域で国際看護や災害看護の授業や演習を担当しています。阪神淡路大震災の被災経験から災害医療や救援システムに関心を持ち、大学院では国際協力政策を専攻しました。しばらく、アフリカや南洋の島嶼国でマラリア対策に携わりました。日本に住む人々が安寧な暮らしをするために他の国や地域とどのような協調が必要か、またそれらの実現のために、未来を担う学生たちに伝えるべきことは何なのかを現在のテーマにしています。体力の衰えは感じつつ、現在も国内外の災害復興や開発途上国の保健医療協力に関わっています。「志あれば道は拓ける」「仕事は楽しく!」をモットーとしています。

奈良学園大学 保健医療学部 リハビリテーション学科

阿波 邦彦 先生



私は中学生の時、野球肘を患い悔しい思いをしたことから、リハビリテーションに関わる仕事に就きたいと思いました。養成校で様々な理学療法があることを学び、九州の病院で理学療法士として勤務した後、理学療法教育を行うため関西へ来ました。

私は理学療法士として、主に「息苦しくて動けない」方々を対象とする呼吸リハビリテーションに携わってきました。現在も臨床に携わっています。「息苦しい」というのは誰にでも経験がある身近な症状です。私は、「息苦しい」を和らげ、「息苦しい」ながらも体力を測定できる評価手法を開発する研究を行っています。

卒業生からのメッセージ



奈良学園大学
保健医療学部
リハビリテーション学科
1期生
瀧田 脩斗 さん

私が4年間の大学生活を振り返った時の感想は「常に何かに追われていた」です。

1回生では大学という新しい環境に慣れることに、2回生ではバイトに、3回生ではテスト勉強や実習前の準備に、4回生では実習や卒業研究、国家試験勉強に追われていました。

忙しい毎日でしたが同時に楽しかった思い出であり、かけがえのない4年間でした。

皆さんが卒業するときにはどのように感じるでしょうか。

楽しい大学生生活だったと思えることを心より願っています。

在学生からのメッセージ



奈良学園大学
人間教育学部
人間教育学科
2回生
大馬崎 むつみ さん

私は、人間教育学部で小学校の教員を目指しています。そのため、小学校教員免許に加えて、より算数・数学について専門性を持った教員を目指して中等数学の免許を取得するために日々学修しています。

課外活動としては、さまざまな活動に挑戦しています。オープンキャンパススタッフをはじめ、幼小接続サークルで「インターネット上の人権侵害の解消のための『低学年の絵本教材』の制作」、地域情報誌「けいはんなVIEW」の大学紹介のページの執筆など、課外でも多くのことを経験させていただいています。

今後も、座学から学ぶことはもちろん、座学では学べないことも大学生活を通して、獲得していきたいと考えています。

地域を素材にした学習を考える

～イコマ製菓本舗を訪ねて～

今回、社会科教育ゼミで調査したのは、全国的な人気により「まぼろし」とまで言われ、生駒市のふるさと納税の返礼品にもなっている「レインボーラムネ」の製造所「イコマ製菓本舗」(生駒市俵口町)です。

レインボーラムネは6つの材料で作られており、できたてのラムネは少し酸味があり、口の中に入れた瞬間にとろけるほど「ふわふわ」しています。できたてのラムネを乾燥させる過程にも工夫がされており、水分がほどよく残り、美味しいラムネができるということがわかりました。

また、多くの人に食べて欲しいという願いから、UHA味覚糖と提携することで、たくさんの方々の手に届けられるようになったそうで、レインボーラムネへの強い思いを感じました。

小学校第3学年の社会科で学ぶことの一つに「地域見られる生産や販売の仕事について」というものがありますが、レインボーラムネを教材に、魅力ある授業づくりができそうです。

文：中谷都愛・酒井彩優(人間教育学部4年生) 文責：澁谷友和

